

大河ドラマ『南海道の晴嵐』を期して(二八〇)

文・出水 康生

戦国おもしろ百話

三好・織田・豊臣・徳川時代に生きる横田内膳正村詮

阿波岩倉・和泉岸和田・近江水口・駿河駿府・伯耆米子への変転(一〇)

近江水口への中村一氏

石山本願寺の顕如上人が天正八(一五八〇)年四月に紀州鷲森(和歌山市)に移り、天正十一(一五八三)年七月四日に秀吉に貝塚に移住させられた。それで岸和田城主中村一氏と交流が生まれた。顕如上人の鷲森在住の頃のことだ。顕如の祐筆であった宇野主水の『宇野主水日記』によって克明に記録されている。それによって中村孫平次一氏の当時の行動が知られる。宇野主水と中村孫平次一氏は面識が「岸和田中村孫平次御札に参り御門主(顕如光佐)新門主(光寿)、興門主(佐超)に御見参。申次は刑部卿、御相伴は主水、刑部卿御兩人、二献夕飯(湯漬)なり」とのように同席することがあって、立場上の厚誼があった。その宇野主水

が記録する。「(天正十三年)五月八日中村孫平次岸和田城より江州甲賀へ罷り越さるなり。そのまま甲賀を領地として長居する用意なり。明日に音信として縮二十端、道服一を刑部卿を御使として遣わされ候御書あり」。これは当事者が直接的な見聞を記録した「一次史料」として確実なものである。天正十三(一五八五)年五月八日に中村孫平次一氏が「江州甲賀」へ移動した時日が注目される。

紀州攻めのこと

天正一十二年十一月二日に織田信雄、徳川家康と講和を結んだ秀吉は、翌年三月に紀州攻めに軍勢十万を自ら率いて出陣する。三月二〇日に先陣の秀次勢が大坂を出発して貝塚に到着。翌日に秀吉は大坂城から出陣して岸和田城に入り、中村

一氏の即時開戦の進言で、圧倒的な兵力差で根来・雑賀衆の沢・積善寺・畠中・千石堀などの泉南の諸城を攻めて次々に三日間で陥落させる。二十三日には秀吉は岸和田城から根来に向かい、同日に根来寺を炎上させ、根来寺は三日間燃え続け、本堂・多宝塔・南大門などの一部を残して灰燼に帰したと言う。二十四日に粉河寺が炎上する。中村一氏・仙石秀久・小西行長らは別働隊として紀南に向かい、秀吉の本隊は雑賀衆の残党五〇〇〇が籠城した大田城を攻めた。当初は「兵糧攻め」が考えられたが時日を要するとして「水攻め」がされた。三月二十八日から築堤が開始され四月五日までに完成させた。堤防の全長は七・二キロメートル、高さ七メートルであった。この築堤の途中で甲賀衆の

担当部分が崩れ、甲賀衆は改易流罪、山中大和守俊好は所領が没収された。大田城の水攻めは四月二十一日まで続き、二十二日に首謀者五十三人の「首級」が差し出され、その首級が大坂

天王寺の阿倍野に梟首され、二十三人の妻が磔にされた。雑兵・農民は退城が許されたが、武器は没収された。この武器没収が兵農分離を意図した史料上での最初の刀狩令と言われる。この処置が蜂須賀小六正勝によって行われた。この紀州攻めの後に紀伊一国は羽柴秀長領とされ、秀長は紀伊湊に吉川平介、日高入山に青木一矩、粉河に藤堂高虎、田辺に杉若無心、新宮に堀内氏善を配置し、藤堂高虎を奉行として和歌山城を築城し、その城代に桑山重晴が任命された。

天正十三年五月三日に秀吉が大坂中之島の東に東西七丁南北五丁の寺地を顕如に寄進して移住させ、順次に阿弥陀堂・御影堂が建立されて大坂天満本願寺と称される。このような五月八日に中村孫平次一氏が江州甲賀(水口)へ岸和田から転出するのである。

横田内膳のこと

中村孫平次一氏が岸和田城主として天正十一年二月から十三年五月八日まで雑賀・根来衆などの紀州勢の北上を抑止し、秀吉が小牧・長久手の合戦に出陣中の大坂城を防衛し、岸和田合戦の激戦を戦い、逆転勝利を「蛸地蔵」に象徴される三階菱紋の三好勢の救援軍で獲得され、その中心にその後の横田内膳正村詮が居たとされる。このように推測されながら具体的な記録が未だ発見することができない。しかし、『中村一氏記』の横田内膳正村詮が誅殺された「横田騒動」のことを記録した直後に次のように記録される。

「内膳は三好殿牢人にて式部少輔の咄物にかかえ申され、今日の大事の沙汰何と存じ候やと申される時、御前の悪しく御座候と申し候へと申さるる時、内膳の存へずる通り申し上げ候へば、一段良く候故に数度の御ためし候と三千石を遣し申され、妹婿につかまつられ候。国の仕置申し付けられ候へば家中の者へあたり国郡も良くなり申し候故に門前市



水口岡山城跡と城下町



岡山城からの眺望



岡山城頂上の城跡



周山城と阿波之宮の説明板

を成し申し候。人の誉と申すこと大形ならず候。…」
 このように横田内膳が三好殿軍人で中村一氏が「咄し者（お伽衆・相談役）」として採用し、その献策が上々で数度の成功を得た後に三千石を与えて一氏の妹婿とした。国の仕置を命じたら家中の信任を得て門前市をなす働きをしたと言うことである。この「国の仕置」「国郡も良くなり」の国・国郡は近江水口・駿河駿府・伯耆米子でのことを一括するものと考えられる。従って中村孫平次一氏が江州甲賀（水口）に移動して岡山城築城、城下形成の時には「家老」としての役割を果たすようになっていたかと思われる。

四国攻めのこと

中村孫平次一氏が江州甲賀に移動した時期には秀吉が紀州平定後に直ちに四国平定を計画して出陣を予定したが病気のために日延した。六月十六日に羽柴秀長を大将、三好康長の養子となつて三好孫七郎信吉を名乗っていた秀次が羽柴孫七郎秀次として副将となり、阿波を主戦場とする長宗我部元親勢との四国平定戦を戦う。秀長は三万の軍勢で和泉各地で徴発した船で堺から淡路へ、秀次は紀州攻めの手勢と秀吉の命令で召集された近江・丹波勢三万で六月二十三日に淡路の岩屋に渡り、淡路島を南下して南淡の福良で秀長勢と合

流する。長宗我部元親に降伏せずに土佐泊城（鳴門市）を拠城としていた森水軍の船団で阿波に上陸して木津城（鳴門市）を八日間の攻防で陥落させた。備前・美作からの宇喜多秀家勢、播州からの蜂須賀正勝・黒田官兵衛勢二万三〇〇〇が讃岐屋島に上陸し、主戦場は阿波であるとして秀長・秀次の本隊と合流する。秀長勢は蜂須賀正勝・家政らと共に江村孫左衛門親俊・谷忠兵衛尉忠澄が守備する一宮城（徳島市）を攻め、秀次勢は黒田官兵衛を参謀として吉野川北岸を三好康長・横田村詮の故城の岩倉城（美馬市）、その総構えの中に包含される脇城を攻める。戦線の不利を元親の家老の

谷忠兵衛が白地大西城（三好市山城町）で指揮する元親に身命を賭しての説得によつて七月二十五日に停戦し、接衛の後に八月六日に長宗我部元親が赦免されて土佐一國が安堵され、阿波には蜂須賀正勝・家政、讃岐に仙石秀久、伊予には小早川隆景を中心とする「国分け」が実行された。そして閏八月二十二日羽柴孫七郎秀次に「江州所々、自分二十万国、相付宿老共二十万石、都合四十三万石」が宛行われ、近江八幡に八幡山城を築城する。この相付宿老六人の一人として中村孫平次一氏が水口六万石の知行が確定する。ただ中村孫平次一氏が近江・丹波勢の中に含まれて四国攻め

に出陣していた正確な記録が見えない。『宇野主水日記』の記録の五月八日に中村孫平次一氏が秀次の閏八月に近江八幡への任命以前に江州甲賀へ移転していたとすると、横田村詮らが岡山築城を先行していたのではないかと考えられる。横田村詮が中村一氏と共に四国攻めに参加していたのなら秀次勢として自分が三十年を生活した岩倉城を攻めたことになる。

岡山城築城のこと

「水口岡山城は天正十三（一五八五）年羽柴秀吉の家臣である中村一氏によつて大岡山に築かれました。築城には大溝城（高島市）の部材を再利用したと言われ、同じ型で作った軒瓦が出土しています。三頂には東西に細長い本丸、空堀を挟んだ東側に二の丸、さらに東に三の丸を配置します。二の丸と三の丸の間は堀切によつて分断されています。それらの周囲には堅堀や曲輪が幾つも存在し、本丸は総石垣であったと推定されます。城郭の規模は甲賀郡随一で滋賀県内でも最大級です。」現在も発掘調査中。